

Bedřich SMETANA
MY COUNTRY Cycle of Symphonic Poems
RAFAEL KUBELÍK
CZECH PHILHARMONIC ORCHESTRA



Cover Photo © J. HOJDAR

PCM DIGITAL

COCO-70713



KUBELÍK
CZECH PHILHARMONIC ORCHESTRA
Prague Spring Festival 1990 Opening Concert Live
SMETANA: Cycle of Symphonic Poems
MY COUNTRY

1990年「プラハの春」音楽祭オープニング・コンサート・ライブ

スメタナ

Bedřich SMETANA

連作交響詩《わが祖国》全曲

MY COUNTRY, Cycle of Symphonic Poems

- | | |
|----------------------------------|--------|
| ① 1. ヴィシェフラト(高い城)..... | 15'39" |
| Vyšehrad | |
| ② 2. モルダウ..... | 11'35" |
| Vltava (Modau) | |
| ③ 3. シャールカ..... | 9'42" |
| Šárka | |
| ④ 4. ボヘミアの野と森より..... | 13'09" |
| From Bohemia's Fields and Groves | |
| ⑤ 5. ターボル..... | 12'59" |
| Tabor | |
| ⑥ 6. プラニーク..... | 14'37" |
| Blaník | |

ラファエル・クーベリック指揮

RAFAEL KUBELÍK conducting

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

CZECH PHILHARMONIC ORCHESTRA

Recorded live at the Smetana Hall, Prague, May 12, 1990 © 1990 Supraphon

晴れやかに、高らかにクーベリックが帰ってきた

●歌崎和彦

1990年の「プラハの春」音楽祭は、これまでになく大きな注目を集めることになった。前年秋のチェコスロヴァキアの民主化後の初の音楽祭であり、それを祝い、象徴するかのよう、かつてその政治体制に反対して西側に亡命していた巨匠ラファエル・クーベリックが42年ぶりに祖国に帰り、「プラハの春」音楽祭のオープニング・コンサートを指揮したからである。

この年第45回を迎えた「プラハの春」は、美しい自然と数々の歴史的な建造物に恵まれた古都で、毎年5月12日、つまりチェコ国民音楽の父であるスメタナの命日に開幕し、そのオープニング・コンサートには、チェコ・フィルがスメタナの代表作である連作交響詩《わが祖国》を演奏することが恒例になっている。第1回の音楽祭が開かれたのは1946年のことで、当時チェコ・フィルの首席指揮者であったクーベリックは、その記念すべき最初のコンサートを指揮しているから、音楽祭には実に44年ぶりの登場となったわけである。すでに1986年5月に、長年の手兵だったバイエルン放送交響楽団との演奏会を最後に指揮活動から身を退いていたクーベリックが、再び指揮台に復帰するには、この国の民主化に指導的な役割をはたした劇作家のハヴェル大統領とチェコ・フィルの首席指揮者だったヴァーツラフ・ノイマンの尽力が大きかったといわれるが、民主化した祖国とその音楽祭への復帰は、クーベリックにとっても単に時間の長さだけでは測れぬ特別の感慨があったことだろう。引退後はニューヨークに居を構えていたクーベリックは、早くも開幕の1ヵ月前に祖国

に戻り、名ヴァイオリニストであった父ヤン・クーベリックの墓に詣で、チェコを訪れたことのない夫人や孫娘たちに祖国を案内するなどして、英気を養っていたという。クーベリックがチェコの政治体制に反対してイギリスに亡命したのは1948年のことであったから、すでにチェコ・フィルには当時のメンバーは1人も残っていないであろうし、オーケストラとの意志の疎通のためにも十分な時間をとったにちがいない。クーベリックが音楽祭前日の5月11日に行なわれたゲネ・プロを公開したことにも、そうした周到な準備をへた巨匠の喜びと自信、そして祖国へのサービスぶりが伺えた。ほくは12日にプラハに入ったために、ゲネ・プロはきくことができなかったが、クーベリックは大変に上機嫌であつたらしい。

しかし、5月12日のオープニング・コンサートは、クーベリックとチェコ・フィルにとっても、また会場の美しいスメタナ・ホールをぎっしりと埋めつくしたチェコの人々にとっても、やはり特別のものであったにちがいない。ファンファーレとともにハヴェル大統領夫妻が入場し、チェコ国歌が演奏されると、クーベリックが祖国を去った時にはまだ生まれていなかったような若い女性までが、感きわまったようにハンカチで目蓋を押さえていたのも印象的だった。そして、そうした感激と興奮を抑えるように固唾を飲んで見守る聴衆に静かに語りかけ、万感の思いを噛みしめるようにじっくりとしたテンポではじまった「ヴィシェフラト(高い城)」の演奏には、クーベリックの長年にわたる望郷の念と、42年ぶりに祖国の土を踏んだ感慨が交差しているように思わずにはいられなかった。クーベリックの指揮を追うチェコ・フ

イルのメンバーの眼も、真剣そのものだった。スメタナの《わが祖国》はチェコ・フィルにとっては、まさに自家薬籠中の作品であるはずだが、やはりこの夜のコンサートは、彼らにとってめ尋常ならざるものだったのだから。めったに味わうことのできないような熱く快い緊張と興奮が会場全体を包み、オーケストラのメンバーのひとり一人が、クーベリックの懐の深い大きくうねるような指揮にすばらしい集中力と熱くしなやかな反応で応えていた。コントラバス9本という低音の力と第1ヴァイオリン8フルトというチェコ・フィル全力の響きも圧巻だったし、ヴァイオリンを左右に分けたクーベリック愛用のオーケストラ配置と、それによって生まれる効果も味わい深い。特に、民族的な旋律や色彩の表出はチェコ・フィルならではの魅力で、「モルダウ(ヴルタヴァ)」の田舎の踊りをはじめ、随所に現われるこうした部分での巨匠は、実に楽しげにオーケストラをリードしていた。クーベリックにとっては4年ぶりの指揮台であり、病気のためか右手が多少不自由だときいていたが、多くの人がフルトヴェングラーのようだというあの独特の間とかうねりをともなった動きは、そのまま祖国と作品への熱い思いがあふれているようであった。

すっきりと美しい流れの中から巧まずしてゆたかなスケール感が生まれる「モルダウ」、爽やかな集中力にとんだ「シャルカ」と、前半の3曲が終わった会場のロビーには、ハヴェル大統領夫妻も現われて気さくに人々と歓談するなど、どの顔も民主化とこの夜の演奏を喜び祝うように輝いていた。しかし、当夜の圧巻は、やはり後半の3曲だったというべきだろう。クーベリックはこの時

の演奏でも、《わが祖国》の前半の3曲を3部作のように、そして後半の3作はいわば3曲が1つになった三幅対の作品のような構成をとっていた。第5曲の「ターボル」と第6曲の「ブラニーク」は、ともにチェコの人々が誇りとするフス教徒の乱という歴史に題材を採り、その主題も共通しているから、もともとそうなるのが当然ではあるが、クーベリックの場合は、「ターボル」と「ブラニーク」をほとんど間を置かずにつづけるなど、特にその感が強い。そして、そうしたクーベリックのこの連作交響詩に対する思いと読みが端的に示されていたのが、1984年のスメタナ没後100周年、クーベリック生誕70年を記念したバイエルン放送交響楽団との演奏会のライヴ録音だったが、この夜の演奏は、構成的にはそれを踏襲しながらも、その表現と音楽はかなり違っていて、いっそう感動的なものだった。民族的な音楽とその色彩をいかにも見事に、真摯に余裕をもって謳歌するチェコ・フィルの演奏ということもあるが、何よりもこの最後の2曲での晴れやかな音楽の力が印象的だった。バイエルン放送交響楽団との演奏が、より強くフス教徒たちの勝利への意志に貫かれていたとすれば、今回の演奏は、勝利への確信をより晴れやかに、高らかに表現しているといっただろう。やはり民主化、開放への確かな1歩を踏みだした祖国へのクーベリックの思いが、このように晴朗にして感動的な表現をもたらしたのではないだろうか。そうしたクーベリックの指揮に対する熱くしなやかなチェコ・フィルの反応と、全員が総立ちとなって15分もつづいた聴衆の熱狂的な拍手にも、まさに同じ思いがこめられていたにちがいない。スメタナの《わが祖国》は、チェコの

人々にとってかけがえのない作品だとはきいていたが、それにしてもこの1990年「ブラハの春」音楽祭のオープニング・コンサートの演奏は、やはりチェコの民主化という時とクーベリックという最良の指揮者を得た故に実現した特別のものというべきだろう。

なお、演奏者について簡単に記しておくと、ラファエル・クーベリック(チェコ読みではクベリック)は、1914年6月29日にブラハ近郊のビホリーで生まれた。父親は有名なヴァイオリニストのヤン・クーベリックで、ブラハ音楽院に学んだクーベリックは、19歳でチェコ・フィルを指揮してデビューするなど、早くから注目された。また、父親のピアノ伴奏者としても活躍して、35~36年には父とともにアメリカにも演奏旅行し、指揮者としてもシンシナティ交響楽団に客演した。1936年チェコ・フィルの指揮者となり、42年に名匠ターリッヒの後任として首席指揮者となり、この間の39~41年にはブルノ国立歌劇場の音楽監督もつとめた。そして、第2次大戦後の47年にはチェコ・フィルとフランスやスイスに演奏旅行して好評を博したが、48年チェコの政治体制に反対してイギリスに亡命した。以後、1949~53年シカゴ交響楽団、55~58年ロンドンのコヴェント・ガーデン王立歌劇場の音楽監督をつとめたのち、61年にミュンヘンのバイエルン放送交響楽団の首席指揮者に就任。1972~74年にメトロポリタン歌劇場の初の音楽監督を兼任したほかは一貫してバイエルン放送交響楽団を指揮して、手兵をベルリン・フィルとならぶドイツ最高のオーケストラに育て上げ、79年にその地位を辞したが、その後も親密な

関係をつづけた。しかし、作曲家でもあるクーベリックは、70歳の1984年に指揮活動からの引退を表明し、86年5月30日のバイエルン放送交響楽団との演奏会を最後に、その後はニューヨークやカリフォルニアで悠々自適の生活を送っていた。

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の母体であるチェコ・フィルハーモニー協会は、ブラハ国民劇場のメンバーを中心に1894年に結成され、96年にドヴォルザークの指揮で最初の公的な演奏会を開いた。当時のメンバーは国民劇場の管弦楽団も兼任していたが、1901年、待遇改善をめぐって国民劇場から独立して、同年10月15日にその第1回の演奏会を開いた。以後チェコを代表するオーケストラとして、マーラーやグリーグ、R.シュトラウスなども客演し、1919年にはヴァーツラフ・ターリッヒが第4代の首席指揮者となって、世界第一級のオーケストラに育て上げた。そして、1942年からはターリッヒに代わってクーベリック、50年からはカレル・アンチェルがその地位にあり、アンチェルが去った68年からはヴァーツラフ・ノイマンが20年余りにわたってその重責を担い、90年9月にはイルジー・ピエロフラーヴェクがこの名門オーケストラの第8代の首席指揮者に就任することになっている(June 1990)。

(注)ピエロフラーヴェクは90~92年の首席指揮者、以後アルブレヒト、アシケナージを経て現在はズデニェク・マーツァルが首席指揮者を務める。

連作交響詩《わが祖国》

チェコ国民音楽の父といわれるベドジフ・スメタナ (1824-1884) が、この6曲からなる連作交響詩に着手したのは、1874年のことであった。この年ちょうど50歳となったスメタナは、以前から悩んでいた耳の病が悪化し、同年11月に第1曲の「ヴィシェフラト」を完成した時には、ほとんど聴覚を失っていた。つづいて作曲された「モルダウ」の総譜には、「まったく耳がきこえなくなって」と記されている。作曲家にとっては致命的ともいえるこうした障害を乗り越えて、スメタナが《わが祖国》全曲を完成したのは1879年のことで、全6曲は、1882年11月5日にブラハで初演された。

1. 「ヴィシェフラト (高い城)」

ヴィシェフラトというのはモルダウ河のほとりにそそり立つブラハ南部の古城で、この曲では、この古城にまつわる栄枯盛衰の歴史が描かれる。曲は、伝説の吟遊詩人が奏でる堅琴 (ハーブ) の調べではじまり、その自由な変奏によって伝説の王たちの戦いと栄光、そして荒廃が回顧されるが、最後に再び現われて過去を追憶するこのヴィシェフラトの動機は、《わが祖国》全曲を統一するライトモチーフにもなっている。

2. 「モルダウ (ヴァルタヴァ)」

南ボヘミアのシュマヴァ山地に源を発し、北流してブラハを通してエルベ河に合流するモルダウ河を描いた傑作で、《わが祖国》の中でも特に愛好されている。2つの水源から発したモルダウが、ボヘミアの森や草原を流れて、やがて聖ヨハネの急流に達し、さらに河幅を広げて悠々とブラハを流れ過ぎて行く

様子が、狩りや農民の踊り、月光と妖精の踊り、そしてヴィシェフラトの動機などを交えて巧みに描かれてゆく。

3. 「シャルカ」

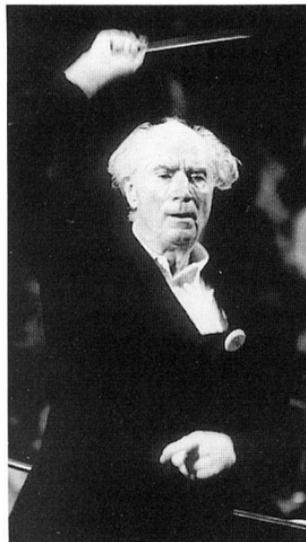
チェコの伝説に登場する女戦士シャルカの物語を題材にした作品で、恋人に裏切られて全男性への復讐を誓ったシャルカの策謀と戦いが、きわめて劇的に描かれている。そして、スメタナはこの曲を説明して、「きき手は各自の想像力を働かせて、この物語を自由に補って欲しい」と書いている。

4. 「ボヘミアの野と森より」

ボヘミアの美しい田園とそこに暮らす農民たちの喜びを描いたこの曲は、《わが祖国》の中でも「モルダウ」に次いで親しまれている。スメタナが、「誰もが各自の幻想に応じて絵をかくことができる」と述べているように、その音楽は野をわたる風とともに、ボヘミアの草原や森への感情を爽やかに喚起して、収穫を祝う農民たちの踊りによって華やかに盛り上がりゆく。

5. 「ターボル」

1415年に火刑に処せられた宗教改革者ヤン・フスの志を継いで、ドイツ出身の国王とカトリック教会に反抗して立ち上がったフス教徒たちの戦いと勝利への確信を描いており、フス教徒の賛美歌「汝らは神の戦士たれ」が全曲を貫くモットーとして使われている。スメタナの愛国心が最も高揚した形で現われた傑作であり、自由と真実を求めて殉じたフス教徒たちの不屈の意志が高らかに歌い上げられている。なお、ターボルはフス教徒たちの拠点となった



To my Japanese friends
with best wishes
and with many greetings

Bedřich Smetana

Prague 18.11.1890

日本の皆様へ心をこめて……

ラファエル・クーベリック 1990年6月18日 ブラハにて

南ボヘミアの町の名前である。

6. 「プラニーク」

前曲と同じく、チェコ国民の民族意識を覚醒したフス教徒の革命を扱った作品で、プラニークはフス教徒たちが集まった山の名前である。「ターボル」の賛美歌が共通の主題として使われ、山にひそんで眠っていたフス教徒たちが祖国の危機に際して立ち上がり、勝利を収める過程が、新しい賛美歌と交えて活写され、フィナーレにはチェコの栄光を確信するようにヴィシェフラトの動機も力強く現われる。

(June 1990)

■CD取り扱い上のご注意 ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。■保管上のご注意 ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。